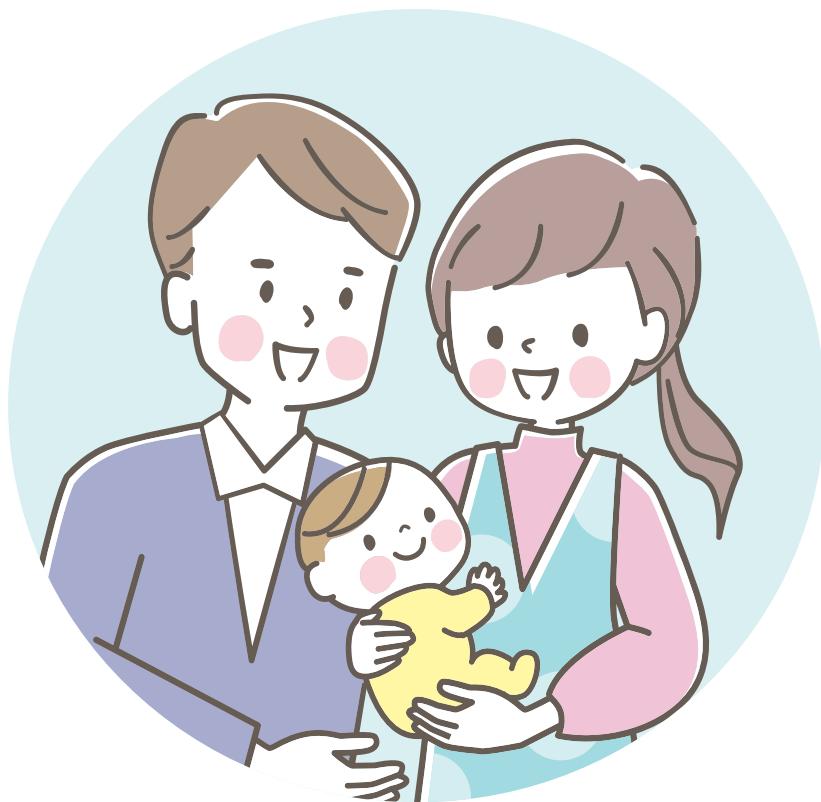


乳幼児の生活と育ちに関する調査

2024年度 0~1歳児調査

【ダイジェスト版:データ集】

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (CEDEP) とベネッセ教育総合研究所は、
子どもの成長のプロセスを明らかにするための研究を共同で進めています。
本冊子は、2024年度に実施した0~1歳児調査の主な結果をまとめたものです。



「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクトについて	p.2
調査概要	p.3
基本属性	p.4~5
1.子どもの生活	p.6~7
①生活リズム	
②遊びやメディア	
2.妊娠中の生活	p.8~9
①父親・母親の意識や行動	
②情報収集と配偶者との関係性	
3.出産体験、出産後の生活	p.10
4.子どもの育て方について	p.11
5.生活時間	p.12~13
①子育て時間	
②子育て以外の時間	
6.父親・母親の負担感・生活満足感	p.14
7.父親の就労	p.15~16
①労働時間・帰宅時間	
②職場環境	
8.子どもをもつ予定	p.17
9.社会に対して感じること	p.18~19
①評価	
②要望	

「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクトについて

研究プロジェクトの目的

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）とベネッセ教育総合研究所は、乳幼児の生活や発達について研究するプロジェクトを共同で進めております。このプロジェクトは、子どもの生活や保護者の子育ての様子を調査し、それらが子どもの成長・発達とともにどのように変化するのかを明らかにすることを通して、よりよい子育てのあり方や家庭でのかかわり方について検討することを目的としています。

本研究プロジェクトでは、0～1歳のお子様を育てていらっしゃる保護者の方々にご協力ををお願いし、2017年度に調査を実施しました。その後、2024年度にも同じく0～1歳のお子様を育てていらっしゃる保護者の皆様にご協力をいただき、調査を実施しました。本ダイジェスト版では、2024年度に実施した0～1歳児調査の一部の結果について、2017年度の調査結果との比較を含めてご報告いたします。

研究プロジェクトの特徴

1

子どもの生活や発達、保護者の子育ての「今」をとらえ、また過去との比較をすることができる

このプロジェクトでは、乳幼児を育てていらっしゃる保護者（調査モニター）に対して、毎年1回継続して調査を実施しています。これにより、子どもの生活や発達、保護者の子育ての実態などの「今」の様子を明らかにできます。また、今回のように一定の期間をおいて同様の調査を実施し、比較することで、0～1歳児を育てる家族が7年間で変わったところ、変わらなかつたところを捉えることができます。

2

子どもの成長・発達の「プロセス」をとらえることができる

このプロジェクトでは、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また保護者のかかわりや意識はどのように変化したり、子どもの成長・発達に影響を与えたたりするのかといった、親子の成長・発達の「プロセス」を明らかにできます。

3

母親・父親の意識や養育行動について幅広くとらえることができる

調査の依頼は世帯単位でおこない、保護者2名（母親・父親）に回答をお願いしています。そのため、養育行動や子ども・子育てに対する意識について、母親・父親の共通点や相違点を幅広くとらえることができるとともに、夫婦関係が子どもの成長・発達に与える影響なども明らかにできます。

調査概要

本調査では、「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクトの調査協力モニターとして登録をしていただいたご家庭に対して、オンライン調査への協力を依頼しました。調査は2025年1月～2月に実施しました。全国の1,335家庭のうち、本データ集で分析をおこなったのは、612名のお父様(有効回答率：45.8%)、979名のお母様(有効回答率：73.3%)の回答です。

本データ集では、本プロジェクトにおいて2017年度に実施した0～1歳調査との比較もおこなっています。2017年度の0～1歳調査は、郵送法(自記式質問紙調査)で2017年9月～10月に実施し、分析の対象としているのは、2,624名のお父様、2,975名のお母様の回答です。なお、以降は2017年度の0～1歳調査を「2017年度(調査)」、2024年度の0～1歳調査を「2024年度(調査)」と表記します。

主な調査項目

子どもの生活の様子、メディア使用、養育行動や養育スタイル、子育ての悩み、配偶者との関係性、生活時間、家事・子育ての分担比率、妊娠・出産前後の気持ち、親性、幸福感、生活満足感、家事・子育て等の負担感、子育てしやすい社会にするために必要だと思うこと、社会に対する評価、これから子どもをもつ予定、育児休業、など

データを読む際の注意点

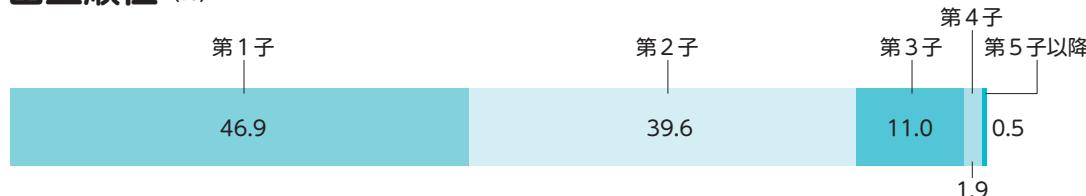
- ① 図表内の()はサンプル数を示しています。なお、質問によっては回答者が母親のみ、父親のみ、就労者のみなどの場合があります。特に()で明記していない場合は、サンプル数はその属性全体を示しています。
- ② 図表で使用している百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入して算出しています。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合があります。
- ③ 2017年度調査と2024年度調査との比較では、回答者の数や属性構成(サンプル構成)、実施時期、調査方法が同じではないため、解釈は注意しておこなう必要があります。
- ④ 2017年度調査について、2024年度調査と同じ条件で比較するために、無答・不明を除いた分母で再計算した場合には、過去に公表した2017年度調査のデータと本データ集のデータとでは数値が異なることがあります。

基本属性(子ども・世帯)

● 子どもの性別 (%)

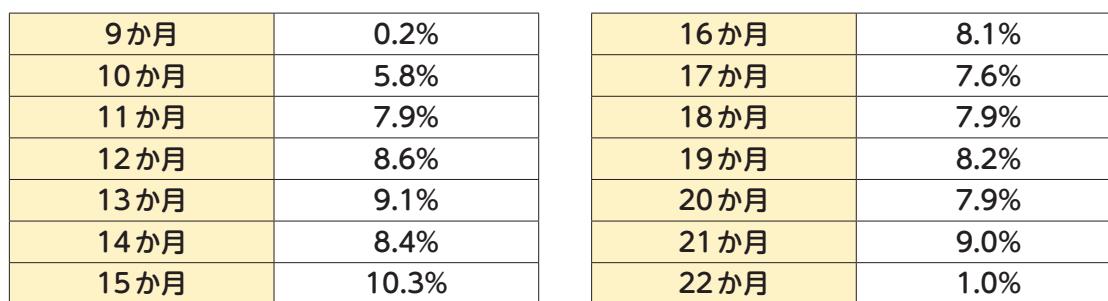


● 子どもの出生順位 (%)

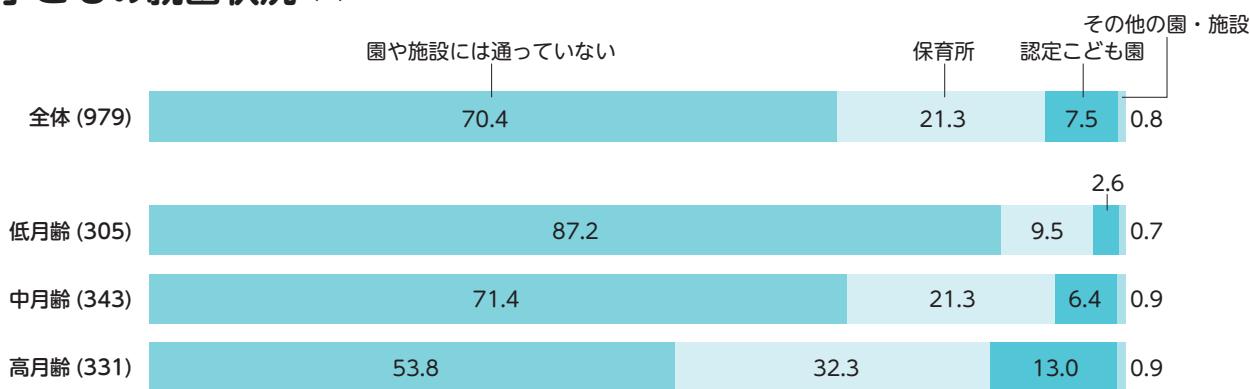


※母親の回答

● 子どもの月齢(調査実施時)：平均 15.7 か月



● 子どもの就園状況 (%)



※母親の回答

※保育所：認可外保育施設、小規模保育室を含む その他の園・施設：保育ママを含む

※月齢区分の低月齢は9か月～1歳1か月、中月齢は1歳2か月～1歳5か月、高月齢は1歳6か月～1歳10か月である。

● 世帯年収 (%)



※母親の回答

※「400万円未満」は「200万円未満」+「200～300万円未満」+「300～400万円未満」。

「800万円以上」は「800～1,000万円未満」+「1,000～1,500万円未満」+「1,500～2,000万円未満」+「2,000万円以上」。

基本属性(父親・母親)

● 年齢

	20代	30代前半 (30~34歳)	30代後半 (35~39歳)	40代以降	平均
父親	13.1%	37.3%	28.9%	20.8%	35.1歳
母親	13.8%	41.5%	32.3%	12.5%	34.1歳

● 最終学歴

	中学校	高校	専門学校・各種学校	高等専門学校	短期大学	大学(四年制・六年制)	大学院	その他
父親	1.1%	17.3%	7.8%	2.6%	1.5%	53.8%	15.7%	0.2%
母親	1.1%	10.2%	13.9%	1.8%	9.4%	57.2%	6.3%	0.0%

● 就労状況

	正社員・正職員	パート・アルバイト	契約社員・嘱託	派遣社員	自営業(家族従業者を含む)・在宅ワーク	産前・産後／育児休業中	休職中(産前・産後／育児休業以外の理由で)	無職(専業主婦／主夫など)	その他
父親	87.6%	1.3%	1.3%	0.7%	5.4%	1.8%	0.7%	0.7%	0.7%
母親	27.2%	8.9%	1.6%	1.0%	3.3%	35.9%	2.2%	19.8%	0.1%

● 就労者の週当たりの労働日数

	週1日	週2日	週3日	週4日	週5日	週6日	週7日(毎日)	不定期
父親(593)	0.0%	0.3%	1.0%	1.0%	80.3%	13.5%	1.5%	2.4%
母親(412)	2.2%	2.2%	1.7%	10.0%	68.7%	6.3%	1.9%	7.0%

※現在(調査時)に就労中の方のみ回答

1. 子どもの生活：①生活リズム

朝は7時前後に起き、夜は8時半から9時頃に就寝する子どもが多く、昼寝は約2時間が多い。

起床時間は7時頃が最も多く、その前後の6時半や7時半を含めると、全体の約7割の子どもがこの時間帯に起きている（表1-1）。就寝時間は、主に20時半から21時頃で、月齢が高くなるほど遅くなる傾向がみられる。また、23時以降に寝る子どもたちも少数ながら一定数いるようだ（表1-2）。昼寝の時間は、月齢が進むにつれて、2時間前後と回答する割合が増える傾向にある（表1-3）。月齢が高くなると就園率も上昇することから、就園という生活の変化が、日々の生活リズムに影響を与えている可能性も考えられる。

Q 対象のお子様は平日、何時頃に起きますか。

表1-1 平日起床時間（全体および月齢3区分別）

	5時以前	5時半頃	6時頃	6時半頃	7時頃	7時半頃	8時頃	8時半頃	9時頃	9時半頃	10時以降
全体(979)	0.3%	2.3%	9.3%	18.9%	33.4%	17.0%	10.3%	3.8%	3.2%	0.6%	0.9%
低月齢(305)	0.3%	2.3%	12.8%	20.3%	30.5%	14.8%	10.5%	4.6%	2.3%	0.7%	1.0%
中月齢(343)	0.6%	3.2%	5.5%	16.3%	32.9%	18.4%	12.5%	4.4%	4.4%	0.3%	1.5%
高月齢(331)	0.0%	1.5%	10.0%	20.2%	36.6%	17.5%	7.9%	2.4%	2.7%	0.9%	0.3%

Q 対象のお子様は平日、何時頃に寝ますか。

表1-2 平日就寝時間（全体および月齢3区分別）

	18時半以前	19時頃	19時半頃	20時頃	20時半頃	21時頃	21時半頃	22時頃	22時半頃	23時頃	23時半頃	24時以降
全体(979)	0.3%	3.2%	4.3%	12.7%	22.0%	26.0%	15.8%	9.5%	3.1%	2.1%	0.4%	0.6%
低月齢(305)	0.7%	5.2%	5.9%	11.1%	24.9%	23.6%	14.4%	8.5%	1.6%	2.3%	0.0%	1.6%
中月齢(343)	0.3%	2.9%	3.8%	11.4%	23.0%	25.1%	15.5%	10.2%	4.7%	2.3%	0.6%	0.3%
高月齢(331)	0.0%	1.5%	3.3%	15.4%	18.1%	29.3%	17.5%	9.7%	2.7%	1.8%	0.6%	0.0%

Q 対象のお子様は平日、どれくらい昼寝をしますか。

表1-3 平日昼寝時間（全体および月齢3区分別）

※夜間以外の睡眠の合計

	昼寝はしない	30分以下	1時間くらい	1時間半くらい	2時間くらい	2時間半くらい	3時間くらい	3時間半くらい	4時間くらい	4時間半以上
全体(979)	0.2%	1.0%	9.4%	20.8%	35.4%	18.6%	11.1%	2.1%	1.0%	0.2%
低月齢(305)	0.0%	1.6%	8.2%	19.0%	28.9%	20.7%	15.4%	4.6%	1.3%	0.3%
中月齢(343)	0.0%	0.6%	8.7%	21.6%	37.3%	16.6%	11.7%	1.7%	1.7%	0.0%
高月齢(331)	0.6%	0.9%	11.2%	21.8%	39.6%	18.7%	6.6%	0.3%	0.0%	0.3%

※母親の回答

※月齢区分の低月齢は9か月～1歳1か月、中月齢は1歳2か月～1歳5か月、高月齢は1歳6か月～1歳10か月である。

1. 子どもの生活：②遊びやメディア

スマートフォンの使用は、1歳半過ぎでは約25%の子どもが15分以上使用している。

外遊び時間の回答の分布は、低月齢・中月齢あまり変わらないが、高月齢になると、「0分」(しない)が減り、半数を超える子どもたちが1時間以上の外遊びをしている(図1-4)。絵本や本に触れる時間は、低月齢から高月齢と月齢が上がるにしたがって、増加している(図1-5)。テレビやDVDの視聴時間も、月齢が上がるにしたがい、増加する傾向にあることがわかる。低月齢から中月齢にかけて「0分」(見ない)と回答する割合が半減している一方で、1時間以上とする回答が増加している。特に2時間以上と回答する割合は低月齢から中月齢にかけて約10ポイント増加している(図1-6)。この年齢の子どもたちの大半はスマートフォンを使っていないが、低月齢から高月齢にかけて、スマートフォンを使う子どもたちは徐々に多くなる傾向がみられる(図1-7)。



対象のお子様が平日に、以下のことをしたり、見たり、使ったりする時間は1日だいたいどれくらいですか。

図1-4

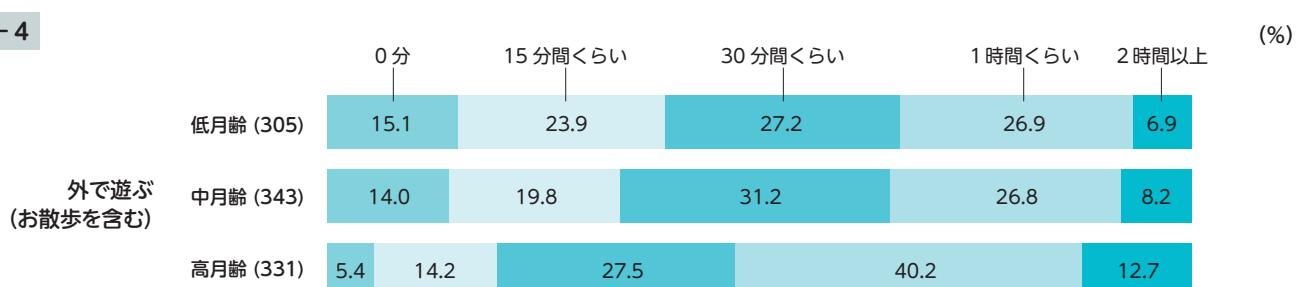


図1-5

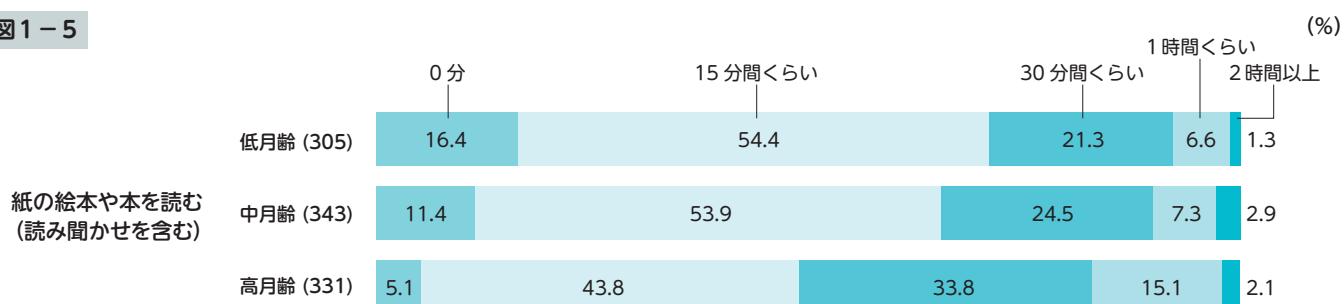


図1-6

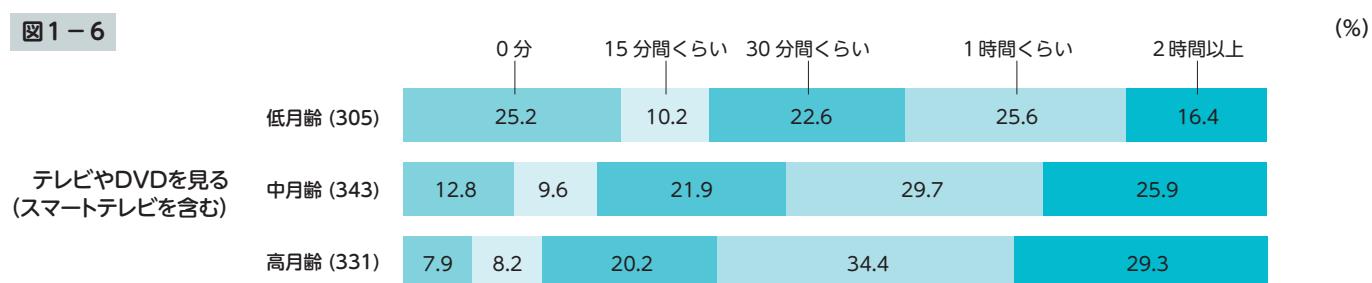
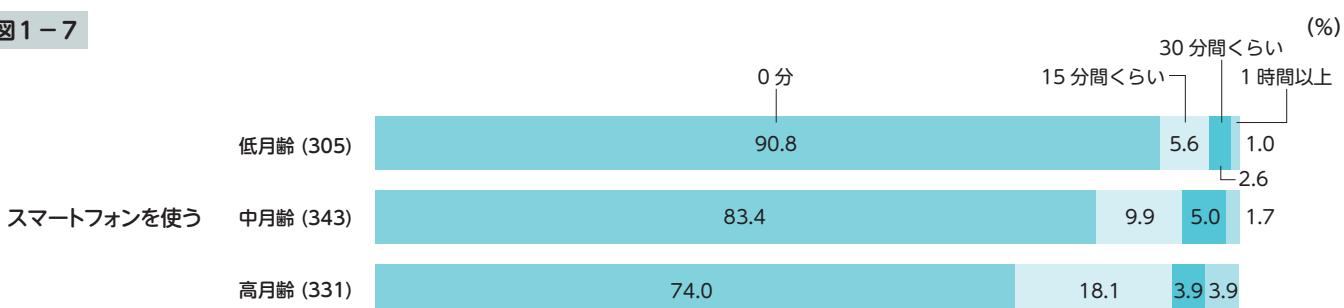


図1-7



※母親の回答

※月齢区分の低月齢は9か月～1歳1か月、中月齢は1歳2か月～1歳5か月、高月齢は1歳6か月～1歳10か月である。

2. 妊娠中の生活：①父親・母親の意識や行動

妊娠中は健康に配慮して生活しつつも、不安やストレスを感じている母親が多い。

妊娠中の生活については、食事や睡眠などには気を遣い、飲酒や喫煙はほとんどしておらず、健康に配慮した妊娠生活を送っていた母親が多いことがうかがえる(図2-2)。一方で、母親の半数以上は、出産や子育てを不安に感じていたようだ。妊娠中にわけもなく落ち込んだり、涙もろくなっていた母親は半数弱ではあるが、約7割がストレスを感じることがあったと回答している。第1子と第2子以降の場合を比較してみると、妊娠生活でストレスを感じることがあったかどうかについては、第1子と第2子以降でそれほど差はみられない。しかし、それ以外の出産や子育てへの不安、妊娠中の気分の落ち込みでは、第1子の場合の方が経験する割合が高かった(図2-3)。

Q 対象のお子様の出産前後の、あなたの気持ちや行動について伺います。

図2-1 妊娠の希望 (%)



図2-2 妊娠期の生活 (%)

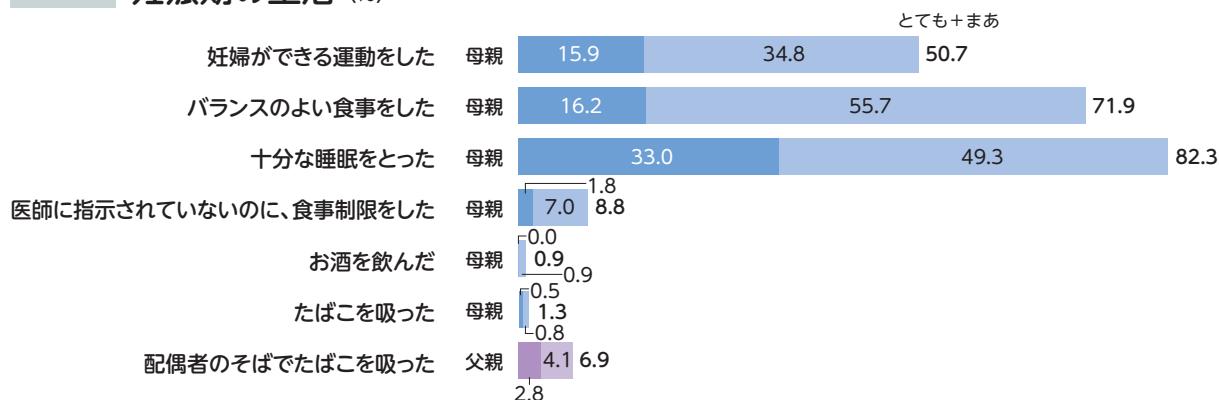
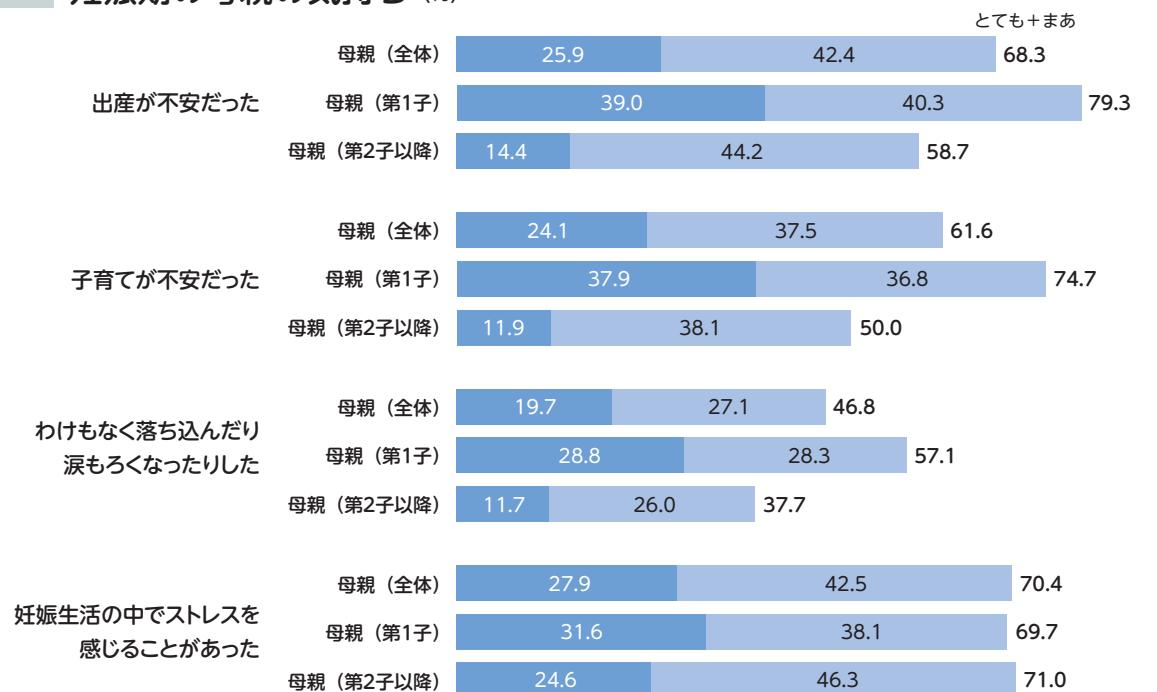


図2-3 妊娠期の母親の気持ち (%)



2. 妊娠中の生活：②情報収集と配偶者との関係性

多くの父親・母親が出産や子育てについて情報収集や話し合いをおこない、サポートの評価も高い。

多くの父親・母親が出産や子育てについて自分自身の親や友人に話をし、本や雑誌、インターネットなど、様々な方法で情報収集をしていることがわかる。一方で、父親・母親学級などへの参加は、母親でも半数に満たない。第1子の場合と第2子以降の場合を比較すると、情報収集は第1子のほうが多いことがうかがえる。特に、父親の情報収集や母親の母親学級への参加は第1子と第2子以降とでは、大きく異なっている(図2-4)。また、父親では約8割、母親では約7割が、妊娠中に配偶者と生まれてくる赤ちゃんをどう育てるか話し合いをしていた。産後の家事や子育ての分担についても、父親の約7割、母親の約6割が配偶者と話し合いをもっていた。妊娠中の配偶者(父親)のサポートについては、母親の評価も父親自身の評価もかなり高く、双方とも約9割がサポートを受けた／サポートをしたと回答していた(図2-5)。

Q 対象のお子様の出産前後の、あなたの気持ちや行動について伺います。

図2-4 情報収集(全体および対象のお子様の出生順位別) (%)

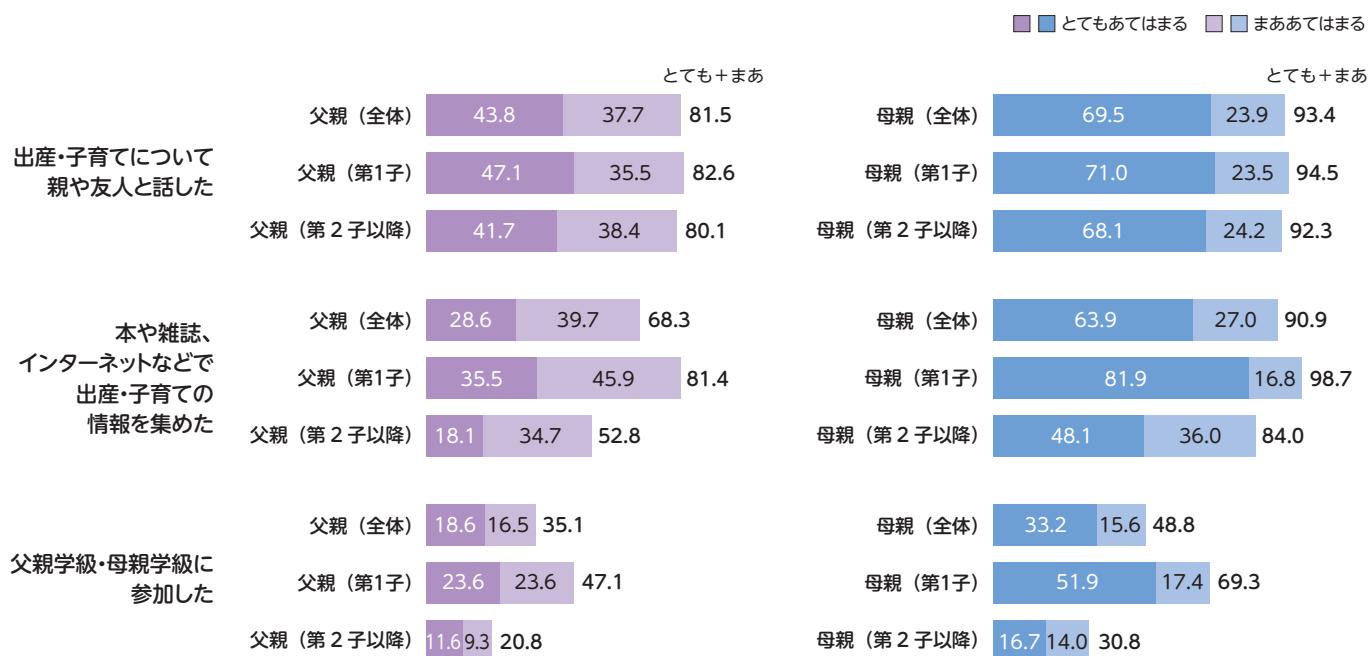
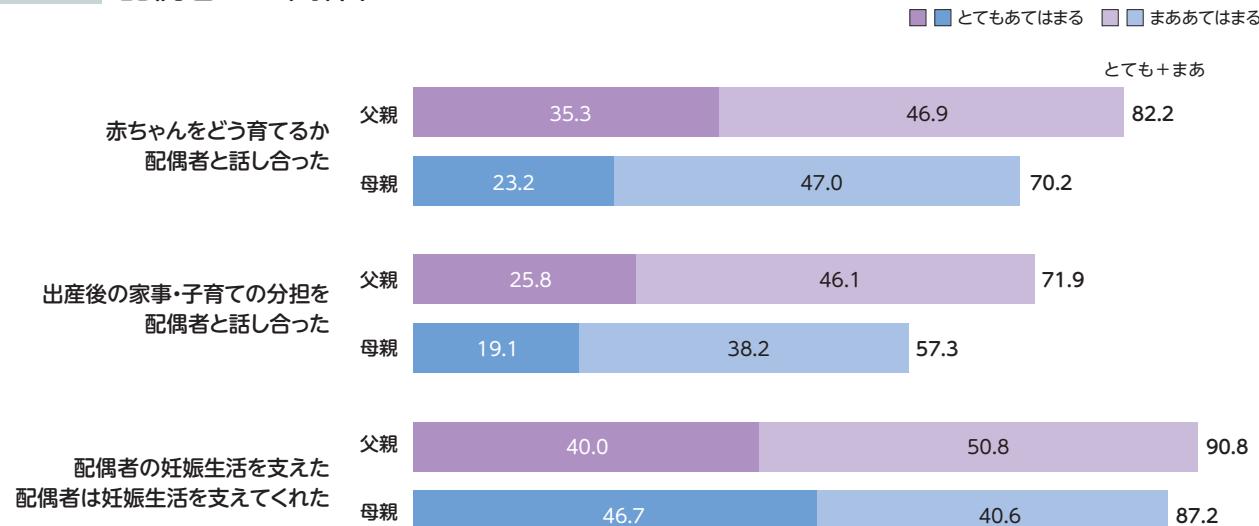


図2-5 配偶者との関係性 (%)



※母親は配偶者のいる方のみの回答

3. 出産体験、出産後の生活

出産は多くの母親にとってポジティブな経験だが、出産後の疲労や気分の落ち込みを経験する人も多い。

多くの母親が出産の経験をポジティブなものとしてとらえおり、出産が自分が希望していたとおりに進んでいたとする母親は75.6%であった。一方で、身体的な疲労感は8割近くの母親が感じていた(図3-1)。子どもが生まれた後の気分の落ち込みなどの経験については、母親では53.1%、父親では12.4%があてはまると回答していた。第1子と第2子以降で比較してみると、身体的な疲れ、気分の落ち込みなどは、いずれも初めての出産の母親のほうが多く経験している。特に、気分の落ち込みについては、第1子の場合と第2子以降の場合で差が大きい。父親も若干第1子の場合のほうが気分の落ち込みなどの経験は多いが、母親と比較すると大きな差ではない(図3-2)。

Q 対象のお子様の出産前後の、あなたの気持ちや行動について伺います。

図3-1 出産時・出産後の母親の気持ち (%)

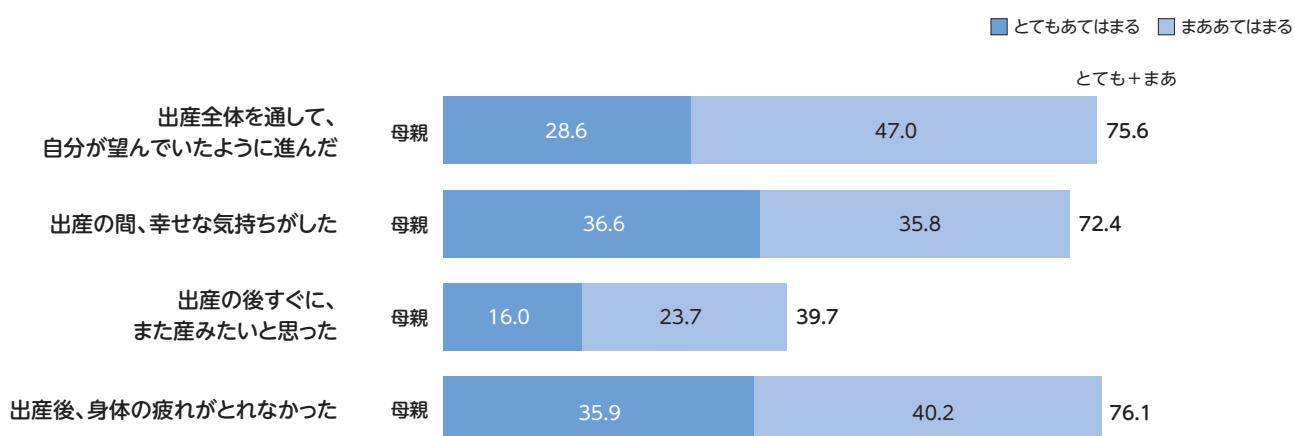
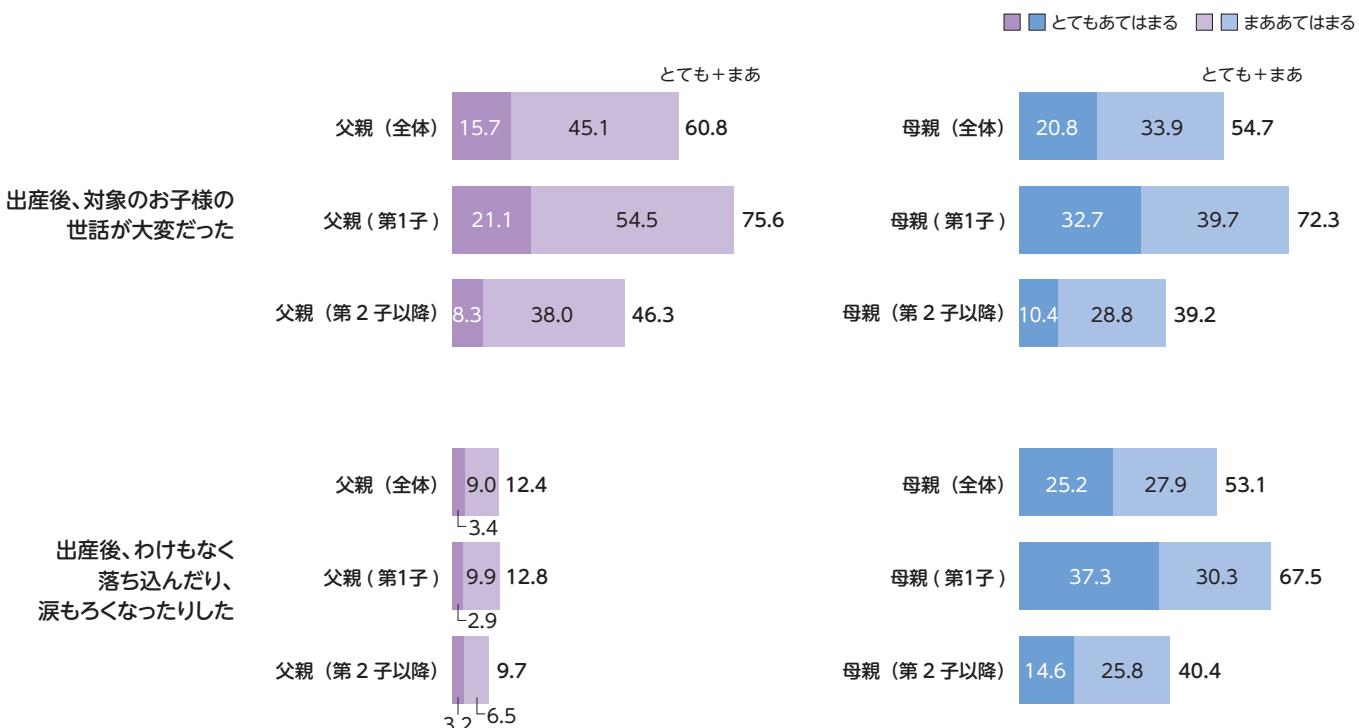


図3-2 子どもが生まれた後の父親・母親の気持ち (%)



4. 子どもの育て方について

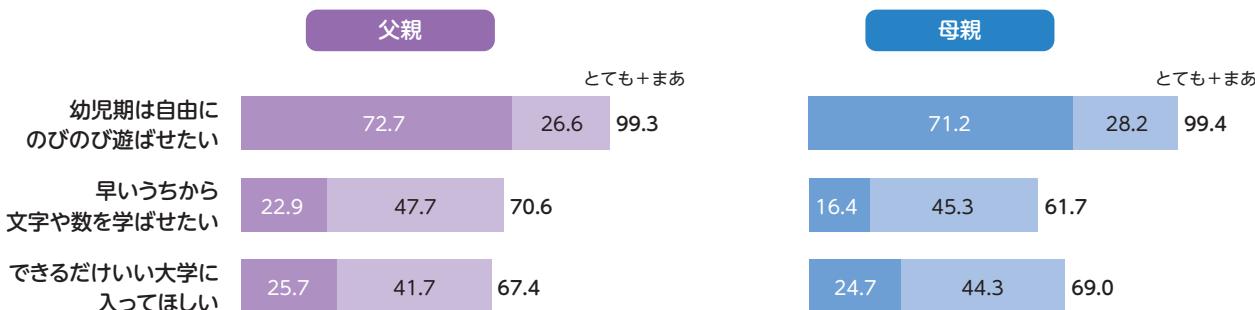
父親・母親ともに幼児期はのびのびと自由に遊んでほしいと考えている。子育てに対する考え方も父親と母親で共有。

ほとんどの父親、母親が幼児期は自由にのびのび遊ばせたいと考えている。早期教育については、父親の約7割、母親の約6割が前向きな姿勢を見せている。将来の進学については、父親も母親も約7割が「できるだけいい大学に入ってほしい」と考えている(図4-1)。7~8割の家庭で、配偶者と子どものしつけや教育について話し合いをしており、配偶者間で考え方の相違もあまりない(図4-2)。妊娠期から配偶者と子どもの育て方について話し合いをしているほど、子どもが生まれた後も、子どもの育て方について話し合いをよくしており、子育てについて同じ考え方をもっていることがうかがえる(図4-3)。

Q 対象のお子様の将来について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図4-1 子どもの育て方についての考え方 (%)

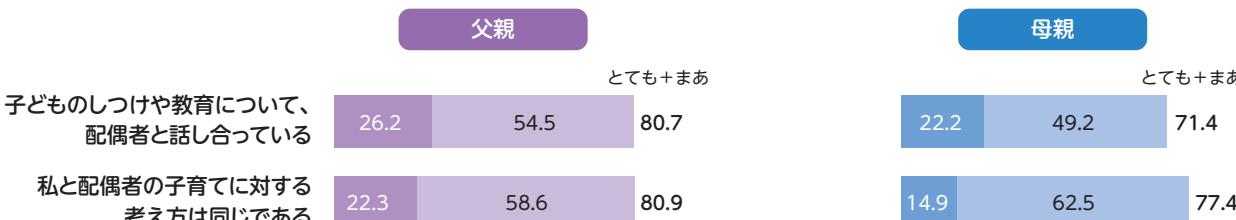
■ とてもあてはまる ■ まああてはまる



Q あなたと配偶者のことについて伺います。

図4-2 配偶者との関係性：子育てについて (%)

■ とてもあてはまる ■ まああてはまる



※配偶者のいる方のみの回答

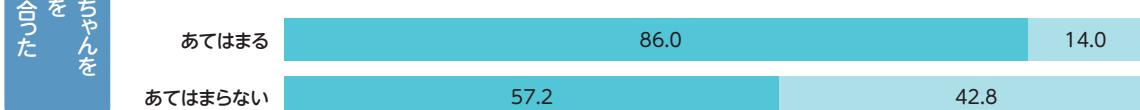
図4-3 妊娠期の配偶者間での話し合いと育児期の配偶者との関係性 (%)

子どものしつけや教育について、配偶者と話し合っている(母親)

■ あてはまる ■ あてはまらない



私と配偶者の子育てに対する考え方と同じである(母親)



※配偶者のいる母親の回答

※あてはまる：「とてもあてはまる」+「まああてはまる」

あてはまらない：「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」

5. 生活時間：①子育て時間

父親の平日の子育て時間は1～2時間、ひとりで子育てする時間は1時間未満。職場の雰囲気が関係している可能性も。

父親の子育て時間は、平日では約3人に1人が「1～2時間未満」、休日は約6割が6時間以上、母親は平日は約3割、休日は約4割が「15時間以上」と回答していた(図5-1・図5-2)。子育てる時間のうち、どれくらいを「ひとりで」子育てするかを父親にたずねた。平日は、「1時間未満」が最も多く(56.7%)、ひとりで子育てる時間はない(=0分)父親は約2割(22.9%)であった。休日も平日と同様の傾向であるが、「1時間未満」が特に多いわけではなく、「1時間未満」(29.6%)、「1～2時間未満」(26.8%)、「2～4時間未満」(21.2%)となっている(図5-3)。父親の職場が、定時に帰りやすい雰囲気があったり、上司が部下の子育てに理解があったりすると、そうでない職場の場合と比べて、平日の子育て時間が長くなる傾向がみられる(図5-4)。

図5-1 平日の子育て時間 (%)

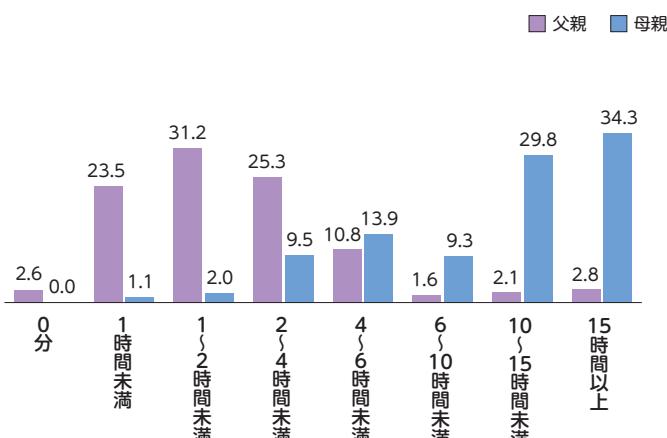


図5-2 休日の子育て時間 (%)

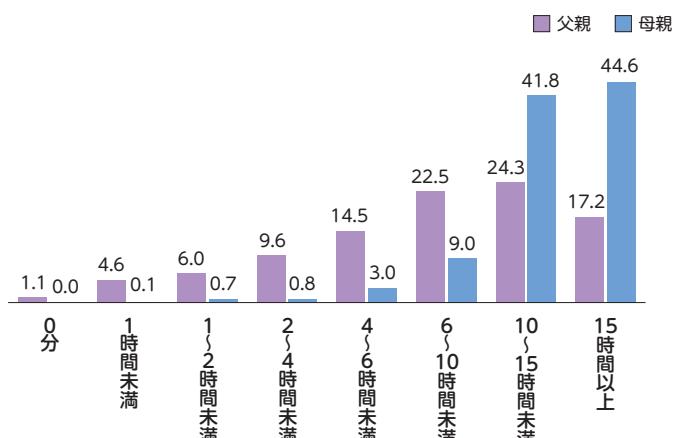


図5-3 父親がひとりで子育てする時間 (%)

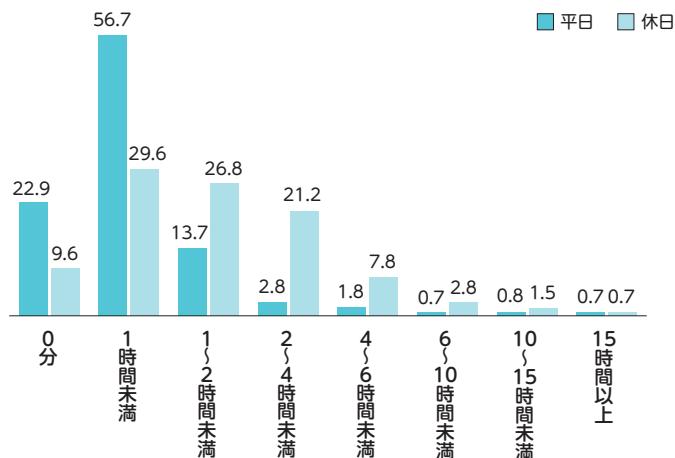
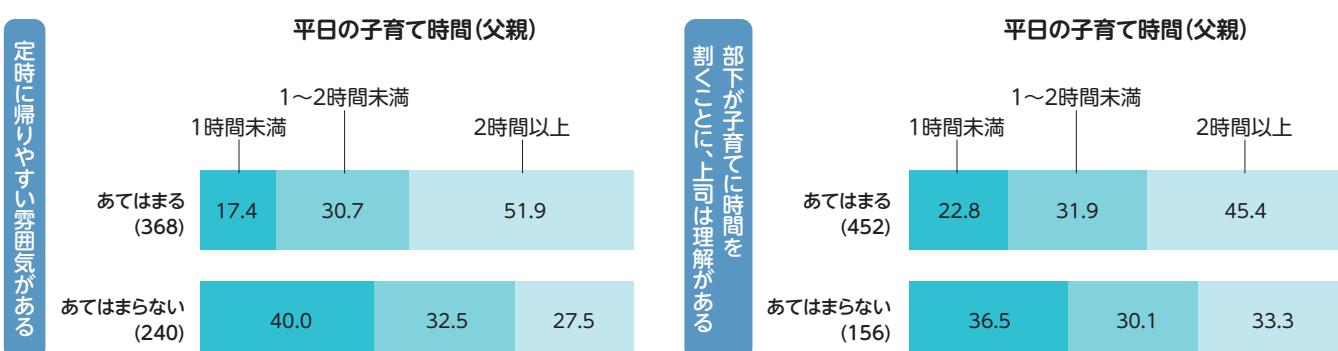


図5-4 父親の職場の雰囲気と平日の子育て時間 (%)



※あてはまる：「とてもあてはまる」+「まああてはまる」

あてはまらない：「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」

5. 生活時間：②子育て以外の時間

母親の家事時間は、平日も休日も2～4時間が最も多い。
睡眠時間は父親も母親も6～7時間が最多で約4割。

平日の家事時間を見ると、父親は「30分未満」、「30分～1時間未満」、「1～2時間未満」の回答が同程度あるが、母親は「2～4時間未満」とする回答が多い(図5-5)。休日では、父親は1～4時間未満の回答が約6割となるが、母親では、平日と休日であまり大きな違いは見られない(図5-6)。自由時間や睡眠時間は父親と母親で回答の様子に大きな違いはない、睡眠時間は父親も母親も「6～7時間未満」が最も多く、約4割となっていた(図5-7、図5-8、図5-9)。

図5-5 平日の家事時間 (%)

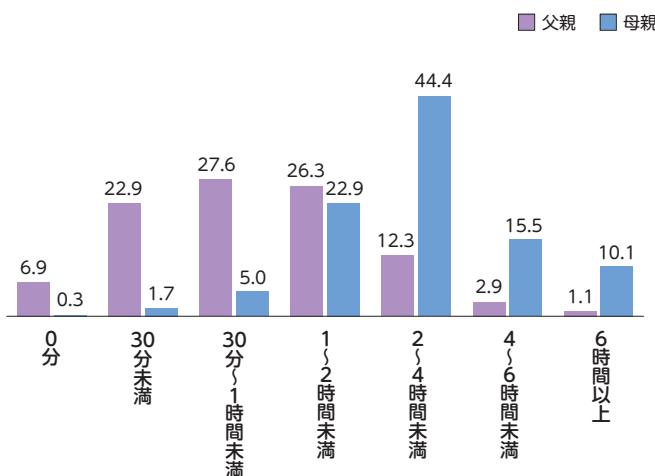


図5-6 休日の家事時間 (%)

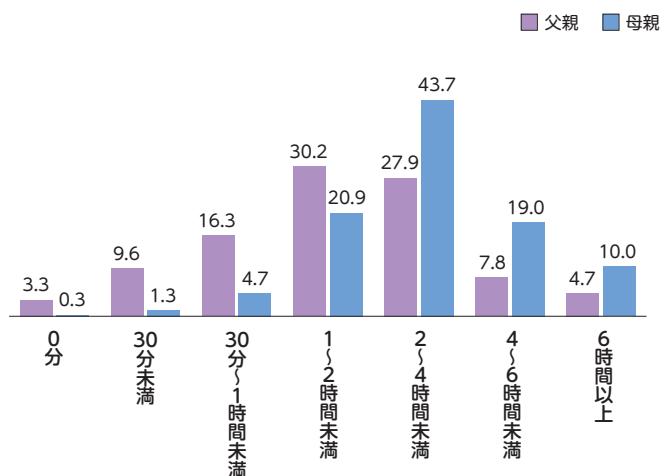


図5-7 平日の自由時間 (%)

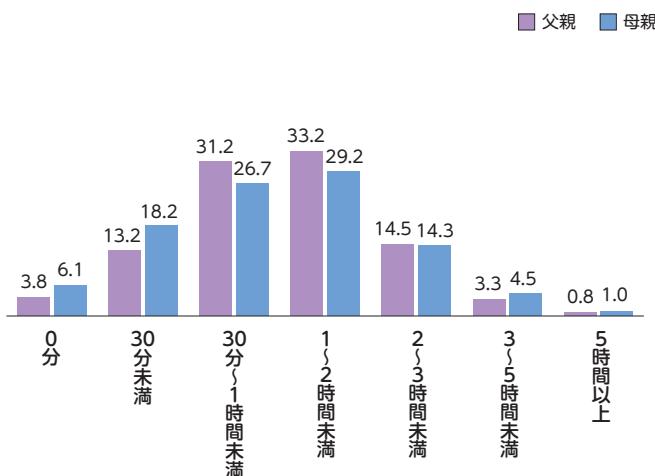


図5-8 休日の自由時間 (%)

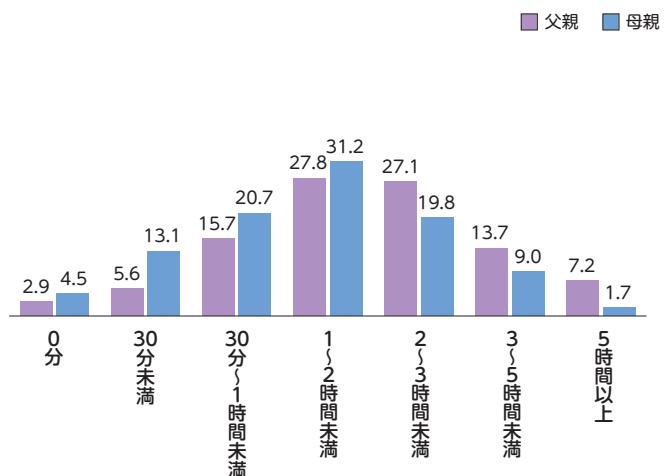
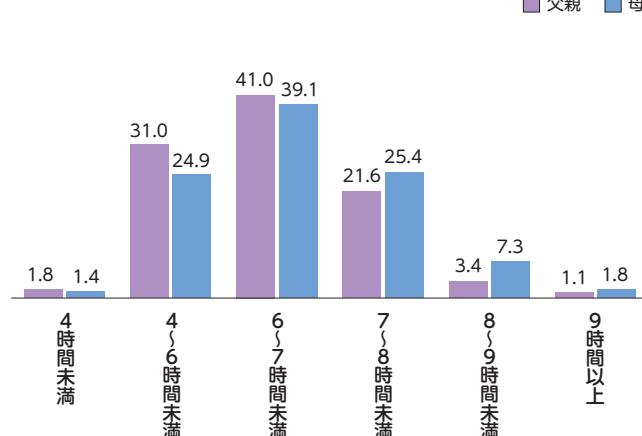


図5-9 睡眠時間 (%)



6. 父親・母親の負担感・生活満足感

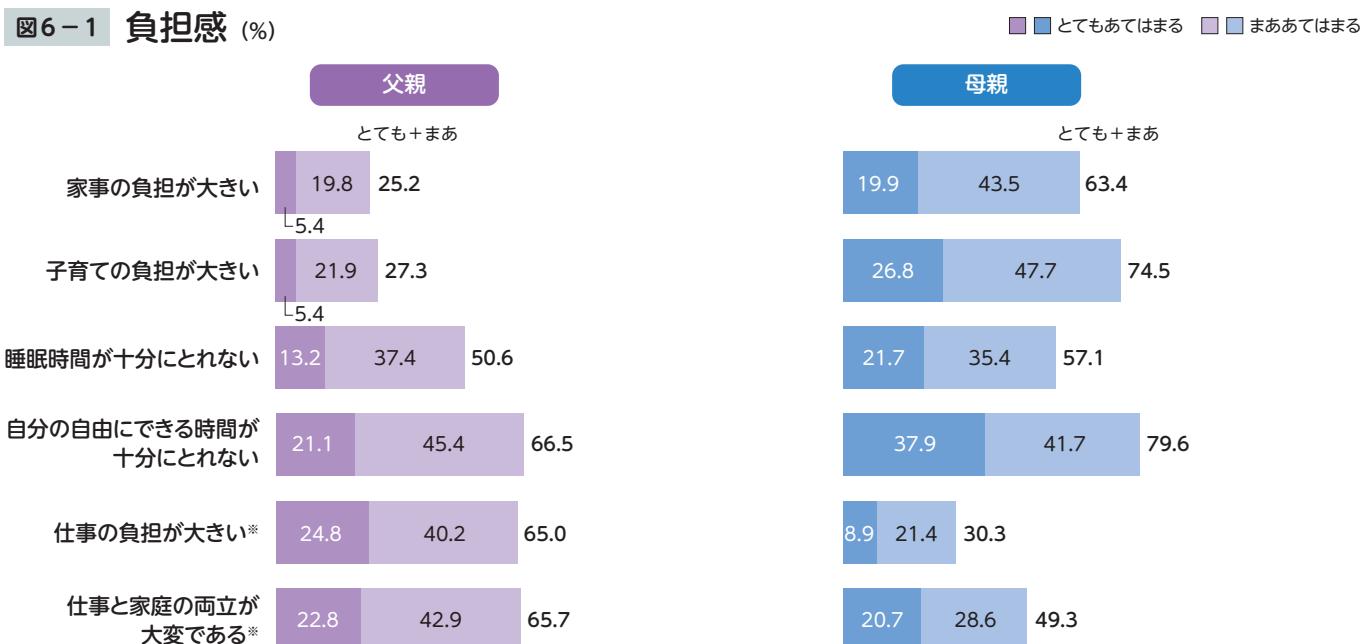
家事や子育ての負担感は母親、仕事関連の負担感は父親のほうが大きい。父親も母親も現在住んでいる地域には満足している。

家事や子育てにおいては、父親に比べて母親のほうが負担感が大きい傾向にある。一方で、仕事の負担感や仕事と家庭の両立の大変さは父親のほうが負担を感じていた(図6-1)。生活の満足感については、満足(とても+まあ)と回答した割合が最も高かったのは、父親、母親ともに家族との関係、次いで住んでいる地域の状況であった。一方で、父親、母親ともに満足度が最も低かったのは、今の日本の状況で、「とても満足している」と「まあ満足している」を合わせても、父親で26.3%、母親で22.0%であった(図6-2)。



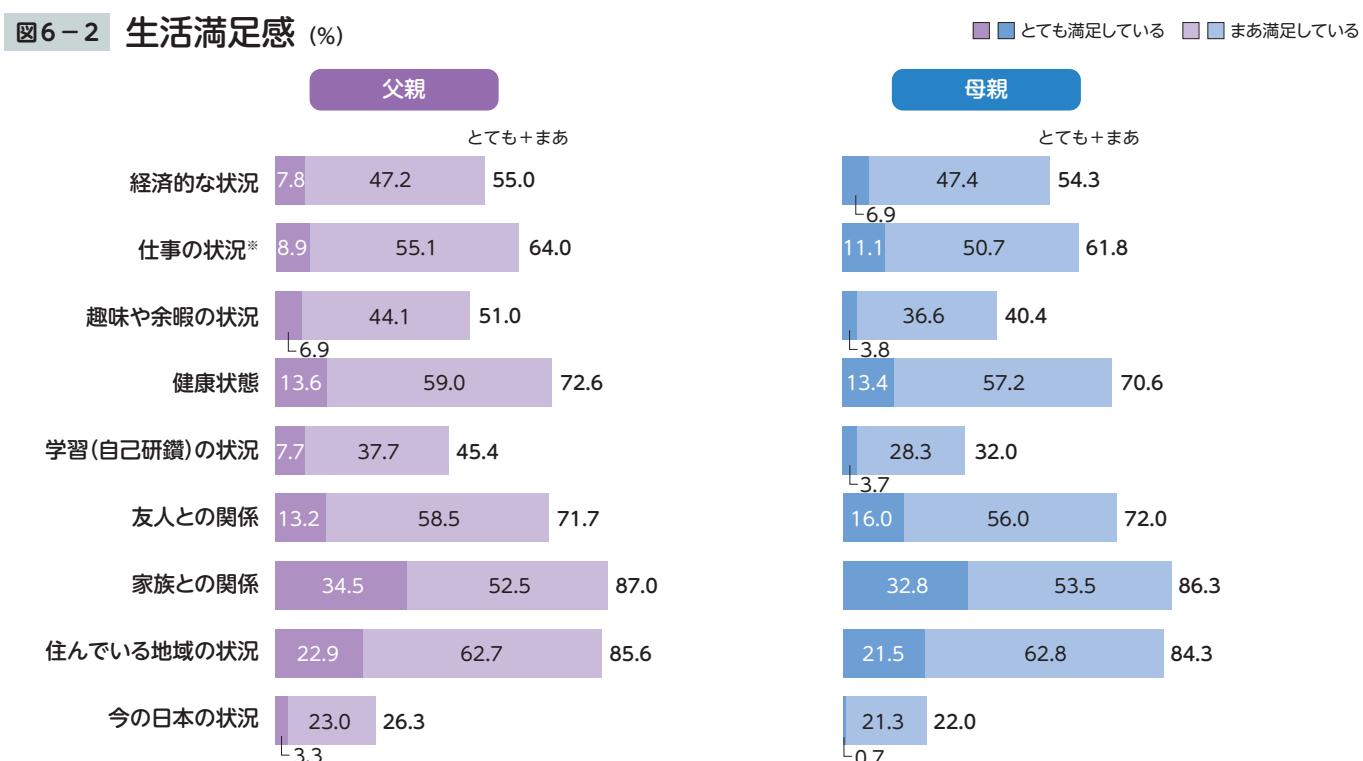
現在のあなたの状況について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図6-1 負担感 (%)



*は就労者のみの回答

図6-2 生活満足感 (%)



*は就労者のみの回答

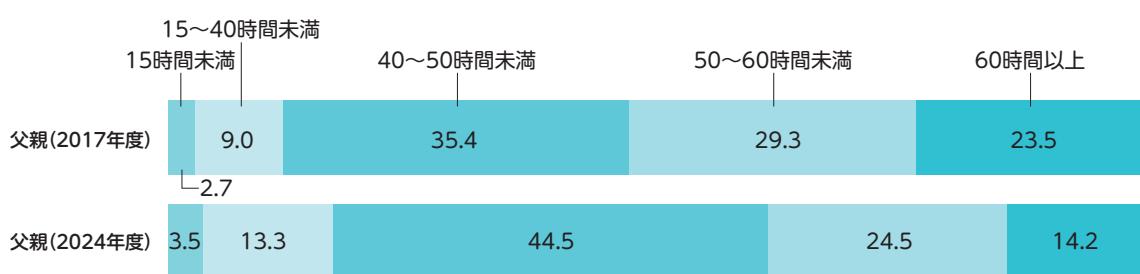
7. 父親の就労：①労働時間・帰宅時間

父親の労働時間は週40～50時間未満が最多。帰宅時間が21時以降になるのは約2割。

父親の約4人に1人は18時台に帰宅している(25.6%)。全体の約7割が19時台までに帰宅している。帰宅が21時台以降になる父親は、2017年度では約3割であったのが、2024年度では約2割に減少した(図7-2)。職場が定時に帰りやすい雰囲気がある場合、18時になる前に帰宅する父親が約4人に1人いる。一方で、そのような雰囲気がない職場の場合、帰宅が21時以降になるとしている父親が約3人に1人となっている。帰宅時間が早いほど、子育て時間も長いという傾向が見られた。21時以降に帰宅する父親の6割が、平日の子育て時間が1時間未満と回答していた(図7-3)。

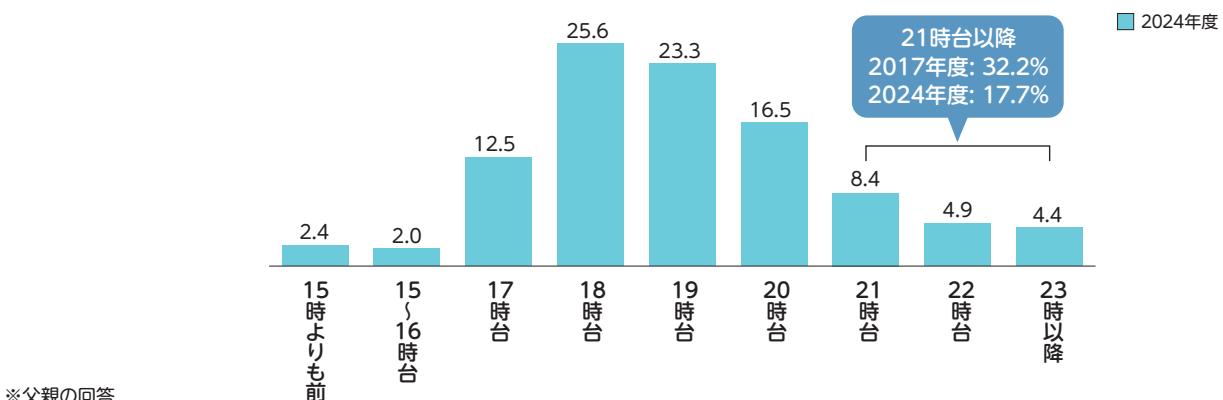
Q 現在のお仕事の1週間あたりの労働時間は何時間ですか。

図7-1 1週間あたりの労働時間(%)



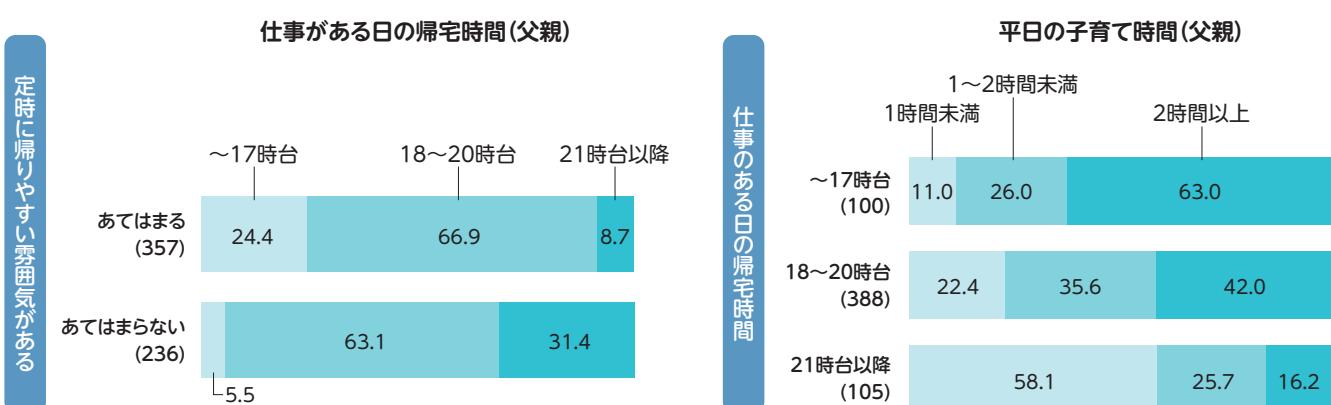
Q お仕事がある日の帰宅時間は何時になることが多いですか。

図7-2 仕事がある日の帰宅時間(%)



※父親の回答

図7-3 父親の職場の雰囲気、仕事がある日の帰宅時間と平日の子育て時間(%)



7. 父親の就労：②職場環境

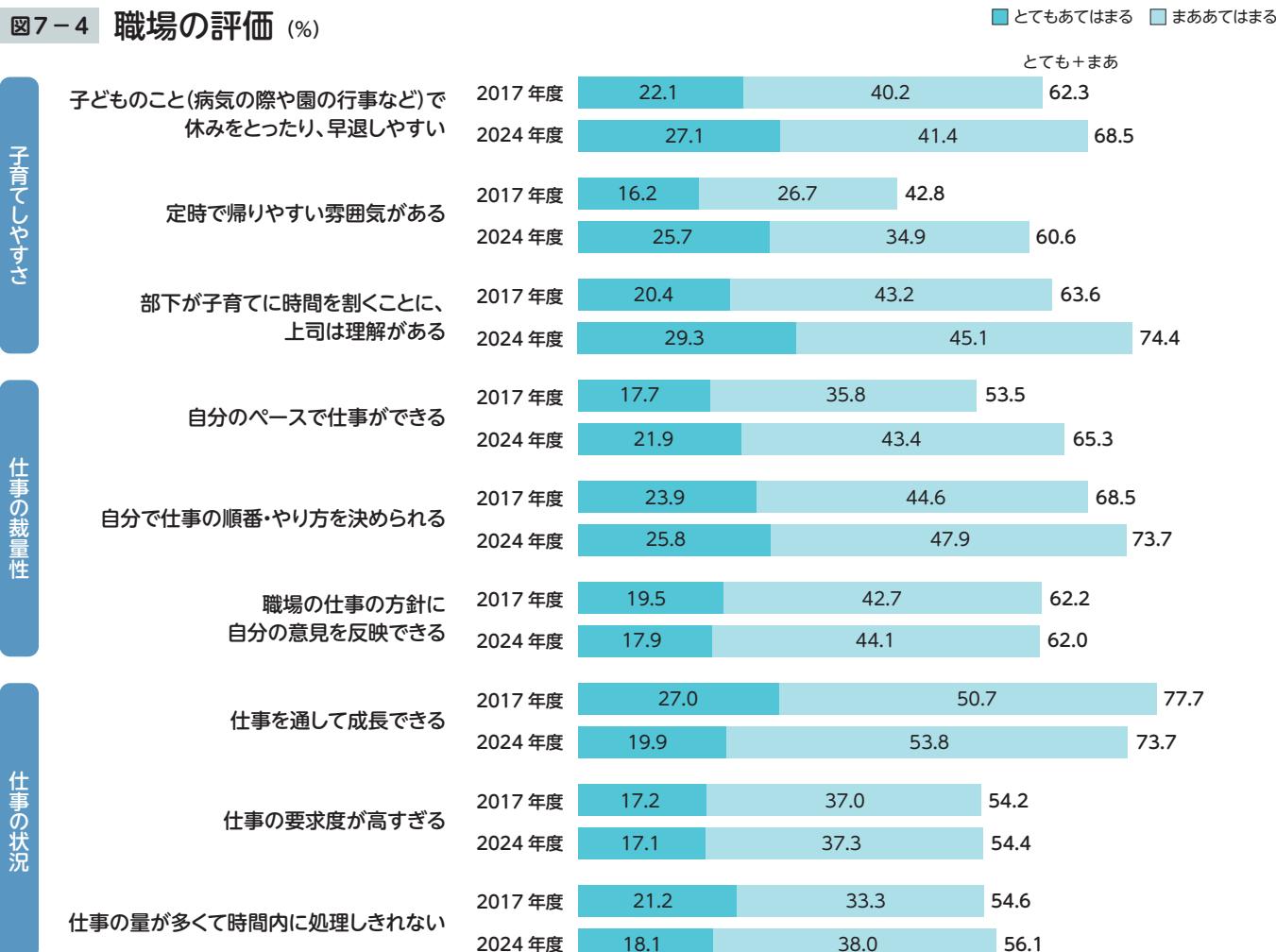
「子育てのしやすさ」という視点からの父親の職場環境の評価は上がってきてている。

2024年度は、職場について約7割の父親が子どものことで休みを取得したり、早退しやすい雰囲気であると回答している。さらに、父親の約6割が、定時で帰りやすい雰囲気がある職場と回答しており、上司も子育てに時間を使うことに対して理解をしていると評価している父親は7割を超える。2017年度と2024年度を比較してみると、子育てのしやすさに関する項目は、いずれも2024年度のほうが評価が高くなっている。特に、定時で帰りやすい雰囲気や、上司の子育てへの理解など、職場の雰囲気が変化してきている様子がうかがえる(図7-4)。こうした職場の雰囲気は、仕事と家庭の両立のしやすさにも関連すると考えられる。実際、定時に帰りやすい雰囲気がない職場では、8割弱の父親が両立を大変だと感じていた(図7-5)。



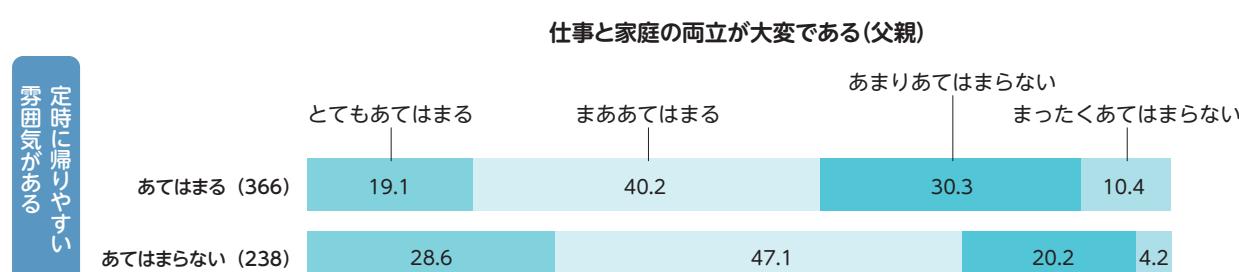
あなたの職場では、以下についてどれくらいあてはまりますか。

図7-4 職場の評価 (%)



※父親の回答

図7-5 父親の職場の雰囲気と仕事・家庭の両立 (%)



※あてはまる：「とてもあてはまる」+「まああてはまる」

あてはまらない：「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」

8. 子どもをもつ予定

母親の約3割、父親の約2割が「もっとほしいが難しい」と回答。その理由として約8割が経済的理由を選択。

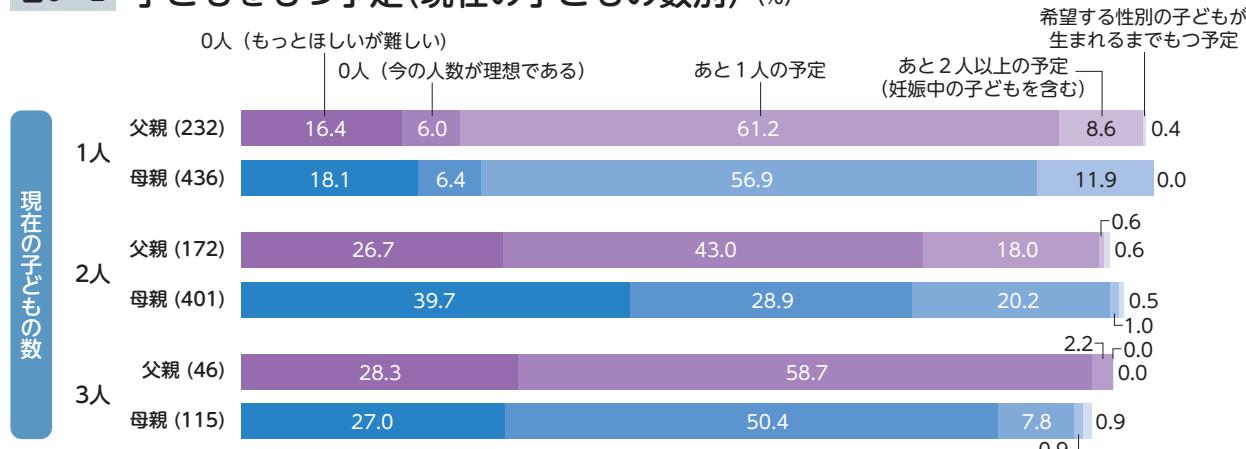
今後、子どもをもつかどうかについて最も多かった回答は、父親、母親ともに「あと1人の予定」であった。母親は約3割、父親の約2割が、希望としてはもっとほしいが、難しいと考えていた(図8-1)。現在の子どもの数別に、今後、子どもをもつ予定をみたところ、現在、子どもが1人の場合は、「あと1人の予定」が最も多く、子どもが2人や3人の場合は、「0人(ほしいが難しい)」や「0人(今の人�数が理想である)」が多くなる(図8-2)。子どもをもっとほしいと希望しているが難しい理由として、母親、父親ともに約8割が「子育てや教育にお金がかかるから」という経済的な理由を選択していた。前回の調査と比べて、大きく増加しているのは、「子育てと仕事の両立が難しいから」を選択した父親で、26.4%から43.4%と17ポイント増加していた。また、父親、母親ともにおよそ10ポイントの増加となっているのが、「子育ての精神的な負担が大きいから」であった。

Q あと何人、子どもをもつ予定ですか。

図8-1 子どもをもつ予定 (%)



図8-2 子どもをもつ予定(現在の子どもの数別) (%)



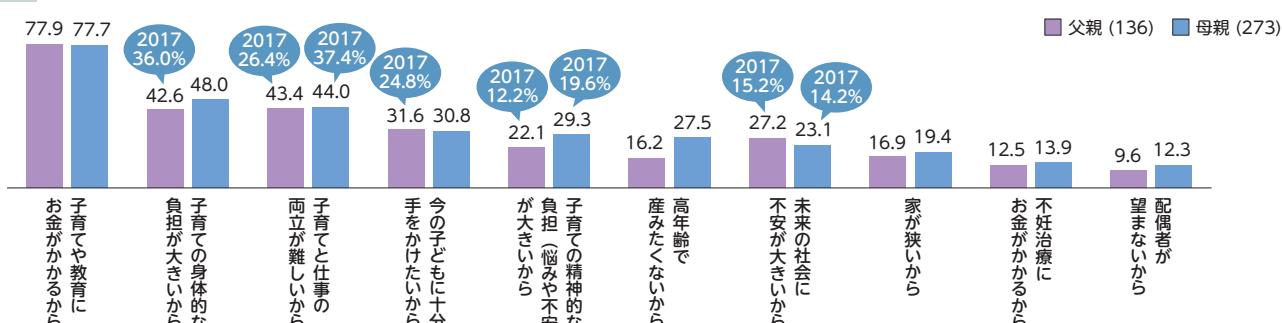
※「現在の子どもの数」は母親の回答による。

※現在の子どもの数が3人までを表示している。

※選択肢「特に考えていない」の回答は表示していない。

Q 「0人(もっとほしいが難しい)」を選択した方にお伺いします。その理由としてあてはまるものをすべて選んでください。

図8-3 子どもを「もっとほしいが難しい」理由 (%)



※「0人(もっとほしいが難しい)」を選択した人のみ

※全18項目のうち、母親の上位10項目を図示 ※複数回答

9. 社会に対して感じること：①評価

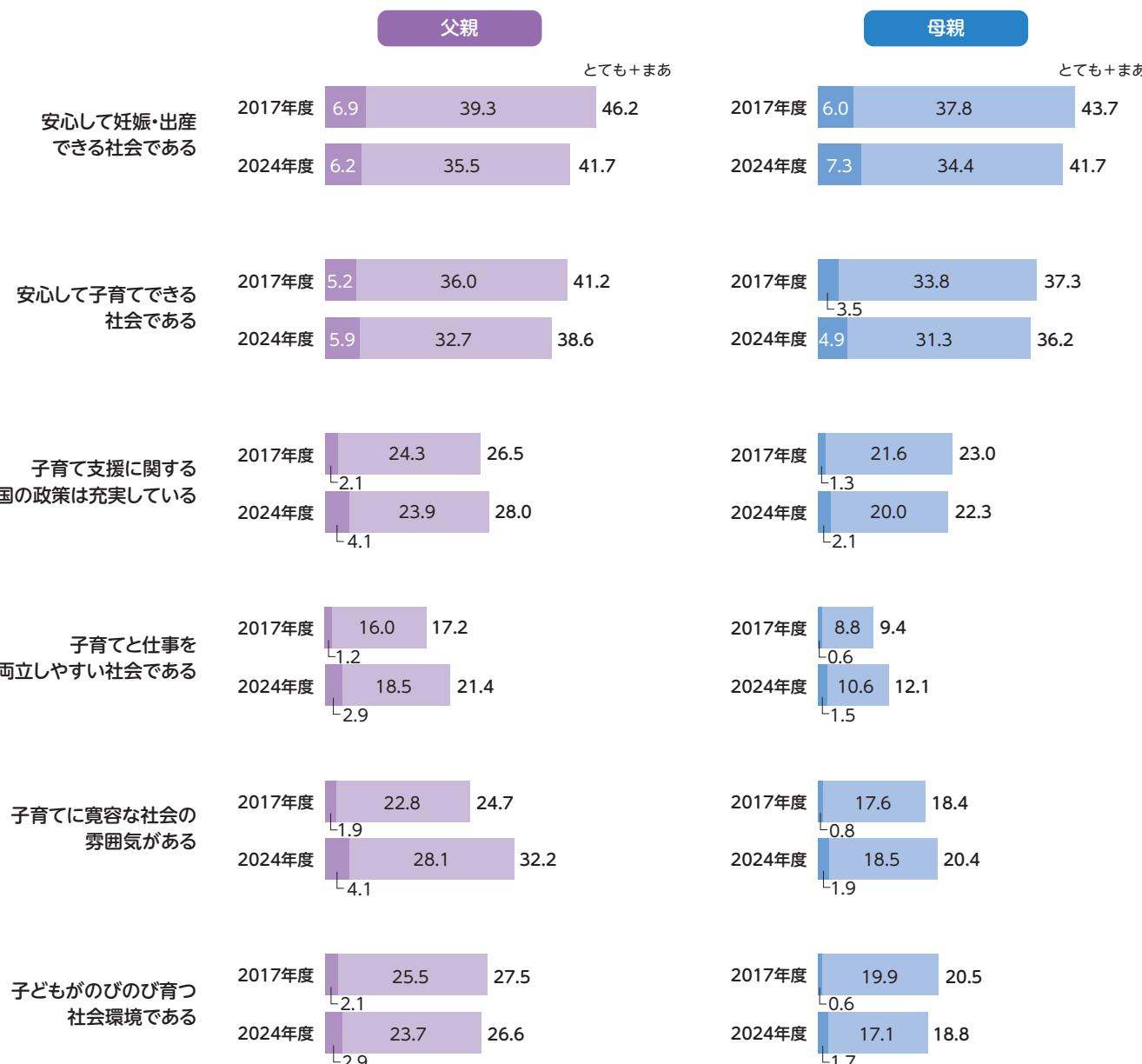
日本が、安心して妊娠・出産・子育てができる社会であると評価している父親・母親は約4割。

いずれの項目に対しても、あてはまる(とても+まあ)と回答した割合が5割を超えたものはないが、全体的に父親のほうが母親より日本の社会に対する評価は高い傾向にある。日本の社会が「安心して妊娠・出産・子育てできる社会である」と感じている父親・母親は半数にも達していない。「子育て支援に関する国の政策は充実している」と感じている父親は約3人に1人で、約5人に1人であった母親より多い。父親について、2017年度と2024年度を比較すると、差がみられた項目は「子育てに寛容な社会の雰囲気がある」(+7.5ポイント)、「子育てと仕事を両立しやすい社会である」(+4.2ポイント)であった。母親では、2017年度と2024年度で大きな違いがみられる項目はほとんどないが、「子育てと仕事を両立しやすい社会である」と評価している母親は微増している(図9-1)。

Q あなたは今の日本の社会について、以下のことをどれくらい思いますか。

図9-1 社会に対して感じること (%)

とてもあてはまる まああてはまる



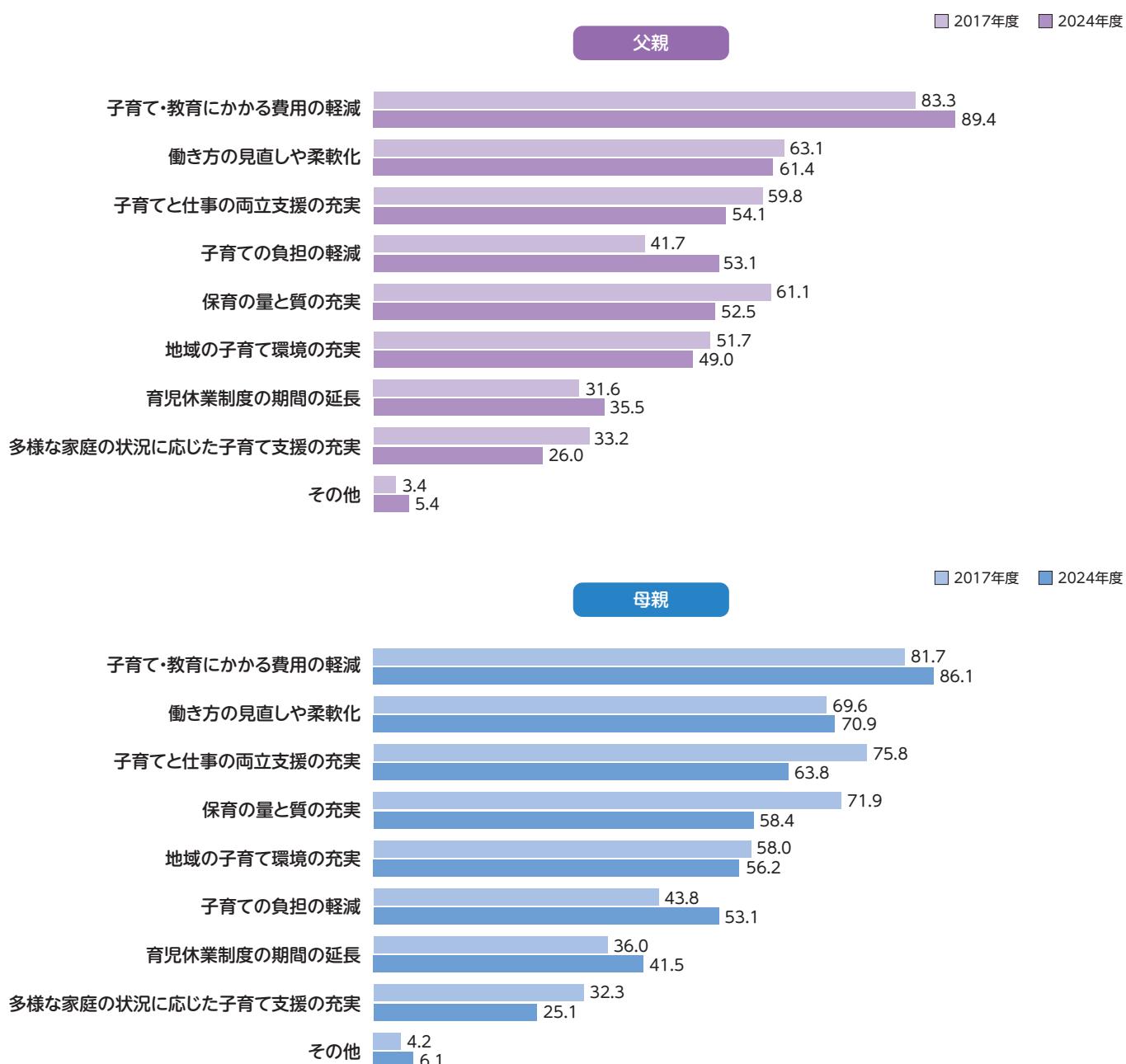
9. 社会に対して感じること：②要望

日本を子育てしやすい社会にするために必要なこととして「子育て・教育にかかる費用の削減」を挙げる父親・母親が多い。

2024年度は、およそ9割の父親(89.4%)、母親が(86.1%)、日本を子育てしやすい社会するために必要なこととして「子育て・教育にかかる費用の軽減」を選択していた。「働き方の見直しや柔軟化」や「子育てと仕事の両立支援の充実」など、子育てにかかる経済面、労働面での社会改善を必要と考えている様子がうかがえる。労働面では、父親も母親も「育児休業制度の期間の延長」よりも、両立支援のほうが必要と考えられているようだ。2017年度との比較では、父親も母親も、保育の充実の選択率は低下した。一方で、父親、母親ともに、「子育て・教育にかかる費用の軽減」や「子育ての負担の軽減」を選択する割合は増加している(図9-2)。

Q 安心して子どもを産み育てやすい社会にするために、今よりもいっそう必要だとあなたが思うものは何ですか。あてはまるものをすべて選択してください。

図9-2 子育てしやすい社会にするために必要だと思うこと (%)



※2024年度の選択率の高い順に上から配置している。

※複数回答

東京大学CEDEP・ベネッセ教育総合研究所 共同研究 「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクト

調査企画・分析メンバー

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (CEDEP)

遠藤利彦(東京大学大学院教育学研究科 教授)

WANG JUE (東京大学CEDEP 特任助教)

江見桐子(東京大学博士課程・CEDEP 特任研究員)

野澤祥子(東京大学CEDEP 特任教授)

則近千尋(東京大学博士課程・CEDEP 特任研究員)

ボード会

秋田喜代美(学習院大学教授・東京大学名誉教授)

小崎恭弘(大阪教育大学教授)

島津明人(慶應義塾大学教授)

ベネッセ教育総合研究所

野澤雄樹(所長)

松本聰子(研究員)

高岡純子(主席研究員)

木村治生(主席研究員)

研究プロジェクト ウェブサイトのご案内

東京大学大学院教育学研究科附属

発達保育実践政策学センター

<https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp>



ベネッセ教育総合研究所

<https://benesse.jp/berd/>



「乳幼児の生活と育ちに関する調査 2024年度 0～1歳児調査」ダイジェスト版：データ集

発行日：2025年11月30日

発行人：小村俊平

編集人：佐藤昭宏

発行所：(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

デザイン：株式会社フライ・ネクスト

OTT001

©Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。